

久居本町 新木屋さんの引き札

飯田 良樹



古物商巡りをしていた時「久居旅籠町新木屋本店並びに久居本町一丁目新木屋分店」と書かれた一枚の引き札（店の宣伝チラシ）が目にとまった。

これは、当医師会会員榎橋先生の医院前に店構えをしている新木屋さんではないかと思い購入した。

「和洋御菓子司並に薄茶宇治茶販売」とも書かれている。新木屋の名物御菓子は野辺乃里で抹茶を練り込んだ半生製の御菓子である。なるほど宇治茶を販売していた関係かと一人で納得をした。

次に気になったのは、「久居旅籠町新木屋本店並びに久居本町一丁目新木屋分店」の文字である。今、店を構えているのは本町で、旅籠町は野辺野神社西の奥田医院近くである。

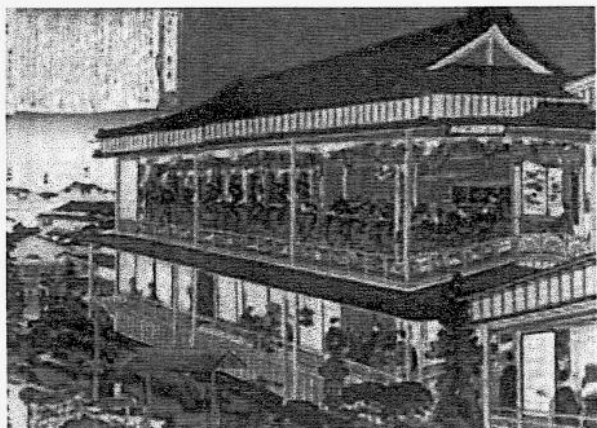
よく見ると、引き札左隅に「明治三十九年七月十日印刷全年八月三十日発行印刷兼発行者大阪市東区備後町三丁目二十七番屋敷平民古島竹次郎」

と読める。

明治には旅籠町で本店を構え、本町に分店を出し、何時の時期か本町に本店を移した模様である。

この引き札は石版印刷で、石を使用して、その上に油性の単色絵の具を塗り、幾つもの石を使用して色を重ねる平版印刷と云うと物の本に書かれているが、私の単純な頭では、凸部分に色を付け紙に押しつけて印刷する凸版印刷や、凹部分に色を流し込み上から紙に吸い取らせる凹版印刷までは何とか理解できるが、平版印刷の原理は講義を受けたり、書物を読んでも何故この様に細かい線が描けたり、色が滲まないのか、残念ながら未だに理解出来ていない。

引き札の印刷は江戸時代から明治時代初期までは木版による浮世絵風に華やかだったり、赤や黒などの単色のものもあった。



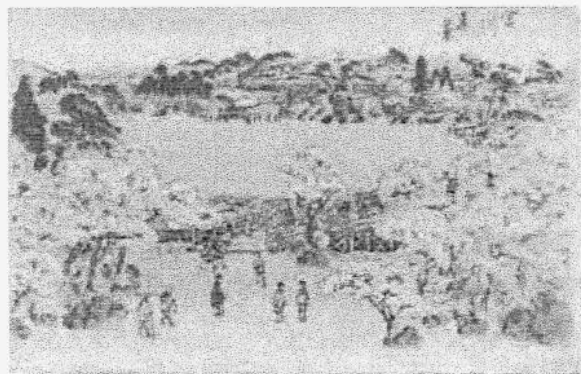
伊勢古市杉本屋の引き札



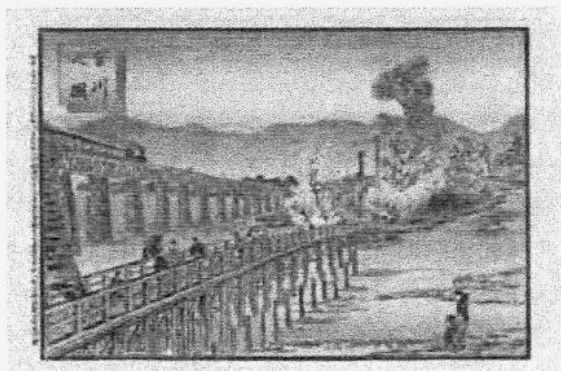
二見浦海水浴之図（旅館二見館の引き札）

その後に銅版画や石版画が明治30年頃より現れ、引き札も多種化されてくる。

伊勢御土産版画の傾向を追ってみると、引き札同様に明治30年頃までは木版画で色の使い方に落ち着きがあるように思える。



同じ宮川の風景を木版画と石版画とで見比べると、上の木版では色使いが柔らかである。



左下の石版となると、色模様が平面的となり、木版とは趣の違いが感じられる。

私見を述べたが、今回の新木屋の引き札をみると、大阪の古島竹次郎の印刷出版となっている。

下の写真はあるオークションに出ていた引き札である。



図柄が同じで店の名前のみが変わっている。これは、古島竹次郎が経営する出版会社が、店の名前が入っていない、いろいろな見本を見せ、引き札を作る店側が見本から選んで、店の名前と商売を刷るといのがわかる。

まさか遠方の兵庫にある高木が、同じ図柄で引き札を作ったとは思わなかったであろう。

旅籠町本店・本町分店が気になっていたところ、勉強会で榎橋尉行先生と御一緒することがあったので、新木屋さんについて尋ねてみた。新木屋さんの御主人上野幸廣氏は患者さんでもあり、懇意にしている方なので御紹介しますよ、と快く紹介していただいた。

会ってみると、御主人の上野幸廣氏は気さくな方でいろいろと私の疑問にお答えしていただいた。

上野家の先祖は、本村で江戸時代より「木屋」という屋号で雑貨商を営まれていた。明治8年に上野太七が分家し、旅籠町でお茶屋を始められた。「木屋」から新しく店を出したので「新木屋」と屋号を決めたとのことである。

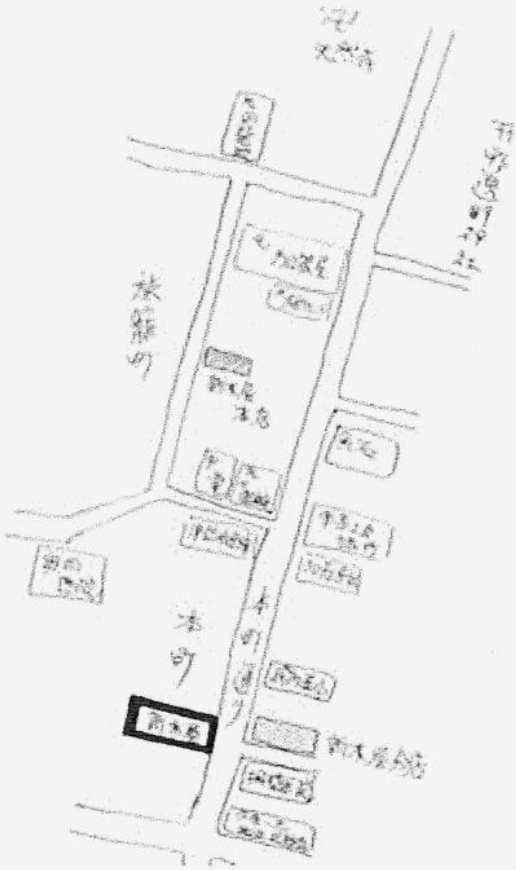
お茶屋をしていた関係で抹茶を練りこんだ菓子を作り、久居の土地は藤堂が移り住むまでは野辺と呼ばれていたもので、「野辺乃里」と命名したとの事。

明治49年に、タナハシ医院の現在駐車場として使用されている土地を借り得たので、分店を出した。その時の新分店開店引き札（チラシ）が、私が入手した物である。

その後、昭和5年に現在のタナハシ医院前の土

地を取得し本店とした。

以上のことで私の疑問は解決した。
新木屋さんの移り変わりを地図にすると、



上は古いお店。下は最近新しくされたお店

上野幸廣氏の許しを得て、新旧の新木屋さんの写真と名物「野辺乃里」を掲載します。

お話では、昔の建物はお店の後ろへそのまま移されたとのことでした。

他にもいろいろな和洋菓子を作っておられますので、皆さまも一度立ち寄られ味わってください。

新木屋さんの名物和菓子



野辺乃里



余談：この『雲出川』が発行される平成29年。4月21日から5月14日に於いて、伊勢の三重県営サンアリーナで「お伊勢さん 菓子博2017」が開催されます。全国のお菓子が集合する博覧会で、新木屋さんは勿論、私の従妹が営業する搭世橋横の一華堂も出品します。私達夫婦は70歳なので、早々とシニア普通入場券の第1期前売り券を買いました。